

現実感覚に関する一考察
～外的現実と内的現実との関連性から

石 谷 真 一

Summary

A Study on a Sense of Reality ~From a Viewpoint of the Relationship between External Reality and Internal Reality

ISHITANI Shinichi

In clinical psychology two kinds of reality are supposed, one is the external reality, which is an objective world shared with others, and the other is the psychic or internal reality, which is his/her own subjective world. A sense of reality can be thought to be much influenced with the relationship between those realities.

This report examined the healthy and desirable way of sense of reality in the view point of the relationship between external reality and internal reality, through studying the novel 'Shimanto Rever'.

By applying theories of analytical psychology and psychoanalysis, the author described the action of Atuyoshi, who is a leading character in that novel, as products of interaction between his inner needs and outer world.

In the view point of analytical psychology, Atuyoshi's action was regarded as a part of his individuation process, and meaningful coincidence of outer world and inner world was found out. In the light of Kleinian's psychoanalytic theory, it was thought that his action was motivated by his inner phantasy that his injured inner object need to be restored. From the viewpoint of Winnicott's and other Independents' psychoanalytic theories, Atuyoshi's action was considered to be the dramatization of his inner phantasy, and the trial of exploring a new way of living.

As a result, the vivid and imaginative sense of reality, which is regarded as a healthy and desirable sense of reality in clinical psychology, was thought to be occurred from the mutually indispensable and dependable relation between the external reality and the internal reality.

1. 外的現実と内的現実、そして現実感覚

われわれが日々経験を重ねている世界を一般に現実と呼ぶけれども、臨床心理学においては、こうした他者と共有している事実的世界とは別に、一人ひとりの心に固有な心理的世界を想定する。前者を外的現実 external reality、後者を心的あるいは内的現実 psychic or internal reality と言い表している。つまり人は二つの現実世界を生きているという発想である。これは精神分析の提唱者フロイト Freud, S. のヒステリー患者の心理治療体験に由来する。フロイトは当初、患者の語る生育史上の出来事は実際にあったことであり、それが原因となって症状が形成されているものと信じた。心的外傷説、あるいは性的誘惑説と呼ばれるものである。しかしやがてこのような患者の言説は実際に起こったことではなく、患者の心が無意識のうちに作り出したものであると見なすようになった。それは患者が恐れつつも自ら願望する事柄だった。患者の心の中では願望することはそれが実際に起こったことと同じであり、現実にあったかのような効果を患者の心と体に及ぼしていたのであった。こうした治療体験からフロイトは、実際に事実が生じる外的現実世界と同時に、患者はもう一つの世界を無意識のうちに生きており、その世界が患者の症状形成に大きく影響しているとの見方をとるようになった。そして精神分析学はこの心的現実世界の解明に向かったのであった。フロイトと並んで心の深層の探求に道を開いたユング Jung, C. もまた心的現実を重視した。ことにユングはフロイトと異なり、心的現実世界の客観性に関心を寄せた。すなわち、ユングはわれわれの心の深部に個人の差異を越えた普遍的な要素が潜在しているとして、これを普遍的無意識と呼んだ。心的現実を生きるとは、時にこのような普遍的無意識の要素と対峙し、それと一人ひとりの意識が主体的に取り組んでいく過程であるとしたのである。

このように述べると、臨床心理学ではもっぱら心的現実を追求し、外的現実にはさしたる注意を払わないできたかのような印象を与えてしまうが、そうでもない。人がその両世界を生きている以上、両者は無関係であるはずはない。ことに外的世界に居場所を見出しにくい精神病患者の生き様を理解することや、外的世界では見事な成功を収めながら生きる実感が得られず苦悶する人を援助するためには、内的現実と外的現実との望ましい関連性とは如何なるものかを考えずにはいられない。こうした場面では、彼らがいかなる現実感覚を生きているのかが問われている。そこで両現実の関連性に目を向けることで、病理的な現実感覚から健康で望ましい現実感覚までを位置づける、有効なパースペクティブを見出そうと試みられてもきた。詳しくは後述するが、人が生き生きとした現実感覚をもって外的現実を経験するためには、外的現実と呼応する内的現実での経験が不可欠であるというのが、臨床心理学の様々な理論的立場を超えた共通認識になりつつあるように思われる。

昨今は、現実感覚が様々なところで問われている。青少年の残虐な事件が報じられるたびに、加害者の現実感覚が如何様なものが云々されるのもその一つであろう。テクノロジーの進歩とその大衆化がわれわれに、これまでに経験したことのない仮想的な世界を提供し、そうした

世界をどんな現実感覚で生き抜けばよいかが問われてもいる。こうした現代的問いに応えていくためにも、臨床心理学において現実感覚を吟味する枠組みが早急に求められていると思う。本稿の目的は、内的現実と外的現実との関連性という観点から、望ましい健康な現実感覚のありようを描き出してみることである。上述したように臨床心理学は、その心理臨床活動を通して現実感覚の病理的な側面により注意を向けてきたといえる。しかしそうして得られた知見は、健康で望ましい現実感覚のいわばネガであると思う。本稿では精神分析とユングに始まる分析心理学の知見を活用して、このテーマに取り組んでみたい。

さて本稿では、臨床的素材を取り上げる代わりに一つの小説を素材として用いたいと思う。映画や小説は、実際の心理面接の過程を提示するのに代わって、臨床心理学では検討材料に用いられることの多い素材である。特に小説は主人公に関する内面描写が行き届いているなら、面接場面でのクライアントの自己表現に質量とも匹敵する材料、心的現実を再構成するための素材が得られるのである。本稿では、笹山久三氏の「四万十川 第一部あつよしの夏」を検討の素材として用いることにする。この小説では、主人公篤義の内面がイメージ豊かに描かれ、彼の引き起こす出来事が内面と呼応するように起こる様が描写されており、外的現実と内的現実との望ましい関連性についての例が提示されていると思われるからである。

2. 小説「四万十川」の要旨

篤義は小学3年生、5人兄弟の真ん中で、家でも学校でも目立たない、居るのか居ないのかわからぬような子供である。彼の家族は貧しい。四万十川の支流にへばりつくように小さな家を立てて暮らしている。彼の父親は若いころに病気を患い、今では行商で家計を支えている。母親は家で食材屋をして父親を助けている。篤義の姉と兄は両親を助けて家庭を支えることを生活の信条にして暮らしているが、篤義と下の弟妹は未だ彼らの邪魔をしないことを求められているに過ぎない。篤義は無口で物静かな子供だが、内面的には豊かな視覚的イメージを持っている。イメージが豊かなあまりそれを言葉にして他人に伝えることが困難で、結果として無口で自己主張せず、他人に追従的なふうに見られている。

篤義の家族には一匹の飼い猫がいるが、その猫が一番なついているのが篤義である。メス猫のキイは何度か子供を出産したが、そのたびに何匹かの子猫が生まれてまもなく間引かれ、限られた子猫だけが育つことを許された。それは篤義の心を痛める出来事であったが、食べ物を商っている家では守られねばならない掟であると言われ、篤義もその言葉を飲み込んで従ってきたのだった。キイと一番親しい篤義はキイの秘密の出産場所を知っていることが多く、目が開くまでに間引かねばならない母親は、気の進まぬ篤義から子猫の居場所を聞き出す必要があった。そして今年もまたキイが身ごもった。また同じことを繰り返すのか。この猫の一件をめぐる篤義と家族とのやり取りがこの小説の前半のテーマである。

今回も篤義はキイが子猫を生んだ場所を見つけ出した。ところがいつもと違い子猫は3匹しかいなかった。育てられるのは2匹までである。いつもなら間引かれる方が多いのだが、今回は1匹だけが間引かれる。一番体の小さな黒猫が間引かれるに違いない。そう直感した篤義の

心にいくつもの絵が浮かんでくる。それはどうにもできない無力感に立ちすくむしかないといった感情の糸でつなぎあわされた過去の映像である。篤義一家の粗末な家の便所の囲い板が日雇い人に引き剥がされ薪代わりに火にくべられるのを黙って見ているしかなかった絵。クラスではないちもんめが行われ、最後までもらわれず、独りぼっちになって皆から嘲笑される絵。一方で篤義の心にまだ目の開かぬ黒猫がキイの乳房を必死にまさぐる姿も焼きついた。陰鬱な気持ちの中、篤義は母親に呼び止められるのを恐れる日々が続く。そしてついにそのときがやってきた。

ここで篤義は思いもかけぬ行動に出る。親に一度も反抗したことのない彼が、他の兄弟でもしないような強さで母親に歯向かったのである。「おら、言わん。知っちゃっても言わん」。思わず口から出たその言葉とともに、篤義は家から飛び出していく。夜遅くなくても家に帰るに帰れないでいる篤義を兄が連れ戻しにやってきて言う。自分は家のことが一番だと思うが、お前がそこまでやったからにはお前の思うとおりにやってみるのがよいと思うと。篤義の思わぬ反抗に出くわした両親もその晩語り合う。「アツがあそこまでやったことを軽う見ちゃあいけん思うがよ。今のアツの気持ち押しつぶすがは、一番いけんがよ」。結局、篤義はそれ以上子猫の居場所を問い詰められることはなく、目が開いた子猫をキイが家に連れてくるに及んで、ついに母親も決心する。目が開いた子猫を間引くことはできないと。篤義が必死になって守り通そうとした願いは通じたのである。

篤義が子猫を間引きから守り抜こうという主張は、彼の心の中で乗り越えられぬ壁のように横たわっていた障害を克服せんとする試み、いつもすべてを受け入れるしかなかった彼が初めて否を主張する挑戦であったと思う。目立たず他人に追従する生き方を彼に強いてきたこれまでの枠組みを打ち破ろうとする、彼の心の底からの叫びであったろう。幾重にも重ねあわされた内的意味を持った行為であったと考えられる。こうしたことが本論で外的現実と内面世界との関連として取り上げたい事象である。ただ、篤義を脅かす内的な障害の克服はこの子猫の一件で済んだわけではなかった。それはまだ内的格闘の始まりに過ぎなかった。小説の後半では篤義の内面描写はより深いものとなり、彼にとって懸案となっているクラスの人間関係をめぐっての現実的な格闘と重複した彼の取り組みが生じてくる。

四万十川とその支流は大蛇に喩えられる。ひとたび洪水となれば川は牙をむいて周辺の家や田を呑みつくしてしまう。それとも無縁ではなかろうが、篤義らの住む村々には大蛇の噂が絶えない。そして篤義自身幼いころ大蛇に出遭った記憶があった。食べられる、彼はあまりの恐ろしさにその話を誰にもできないでいた。以来、大蛇は彼の心の中に住み続け、時に鎌首を持ち上げた絵を彼の心に送り込んで彼を苦しめるのだった。

学校に上がった篤義はクラスの子供たちになじめなかった。兄弟以外に付き合う友達がいなかった彼は、子供たちどうしの時に残酷なほどの形をとって現れる軋轢に戸惑った。彼はその軋轢の標的にならぬようと臆病になり目立たぬようにと振舞うようになった。それでもはいちもんめで、一人残された時には周囲がいっせいに彼を笑いからかい、笑いの渦に曝された。彼にははいちもんめの列がとぐろを巻いた大蛇に重なって見えた。以来、彼は蛇に見つから

ぬよう、睨まれぬようにと、クラスでもこそこそと行動するようになった。篤義がクラスメートの中で目立たぬようにひっそりと居ようとしたのは、彼の家庭の貧しさゆえでもあった。子供同士の間では貧しさもまた嘲りやいじめの格好の標的であったからだ。篤義はおどおどしびくびくしながらクラスで過ごしていたのだった。

そんな時、一人の転校生が来た。千代子というやはり貧しい家の娘だった。千代子はその貧しさゆえにクラスメートからさんざんに笑いものにされいじめられた。篤義は千代子が自分の身代わりのようにいじめられていると感じた。千代子がいじめられると辛かった。しかし止めることはできなかった。そんなことをすれば、級友の矛先は自分に向かうに違いなく、恐ろしくてできるはずもなかった。黙ってじっとうつむいて時にこぶしを握り締めて篤義は耐えるしかなかったのだ。

そんな日々に転機が訪れる。ある日教室で級友の一人が持ってきた文房具が紛失する。子供たちは貧しい千代子が盗み取ったのではないかと詰め寄る。否定する千代子をよそに「詮議」はエスカレートし、千代子の持ち物が一切合財衆目に曝されようとした瞬間、篤義はとっさに自分が盗ったと千代子をかばおうとする。千代子を救いたいとの思いから出た行動であったが、篤義にも疑われていると知った千代子は逆に傷ついてしまう。追い詰められた篤義はもう逃げられず、「詮議」の中心になっていた喧嘩好きの男児に向かってゆく。「なせ千代子が犯人か言うてみい。塩飯の何がわりいかも言うてみい」。とぐろを巻いた大蛇の顔めがけて投げつけるように、つもり積もった言葉を篤義は男児に吐き出した。けんかを仕掛けてきた男児にしたたかに殴られながらも、篤義はひるまず向かっていき男児を負かしてしまう。

担任の吉田先生が駆けつけて事態は収まるが、篤義は先生から夏休みに手紙の宿題を課される。今回の行為に至った心の動きを言葉にして教えてほしいと。篤義は先生に促されて手紙の中で初めて、心の中に巣食っていた大蛇の話をする。そしてその大蛇がクラスにも居て彼を脅かし続けてきたことも。彼を臆病にし続けてきたその大蛇と戦おうとしたことが、この一件の彼なりの意味であったことが手紙から伝わってくる。

小説は夏休みも終わりに近づいた篤義の様子を描いて終わる。彼はこの夏休みの間に兄から特訓を受けた素もぐり漁で同級生の誰にも負けない腕を身につけた。それに伴い、彼の元に何人かの同級生や年下の子が寄り付くようになった。彼は依然として無口でお人よしでもあったが、おどおどした性質だけは信じられないほどきれいに消えうせていた。

小説はその前半で子猫を間引きから守ろうと母親に立ち向かうことで、後半ではいじめを受け続ける千代子を見かねて級友に立ち向かうことで、篤義が自分の中に巣食う臆病さや無力感と格闘し、それを克服していく過程が描き出されていると思う。彼の心の脆弱さは、彼の家族が貧しさゆえに、この地で日々生きていくのに難渋してきたこととも関連しているだろう。篤義は彼の家族がこの土地にしっかりと根づくことで得られるはずの、自分を支え守ってくれるゆるぎない安心感をもてないで来た。それゆえ彼は健康な自尊心や自信、そして適切な自己主張ができないできたのだろう。したがって彼の内的な課題は彼の家族が共有する課題でもあったろう。家族一人一人がこの課題と向き合い、それに自分なりの答えを見出していくことが求

められているのだろう。篤義もまた児童から少年へと育つ節目で、どうしてもこの課題に直面せねばならなかったのではなかろうか。ただし、こうした内的な心の課題は心の中だけで取り組まれるものではない。小説に描かれているように、手ごたえのある現実の課題に取り組むことを通してこそ、実感のある体験となって、心を変容させる力を持ちうるのである。こうした事象は小説の中だけのものではなく、子供や大人の心の成長や変容の過程で必然的に生じているものだと思う。心理療法の過程はこうした内的な心の変化と外的な変化との見事な呼応を時に顕著に見せてくれるものである。さて、本論では内的世界と外的世界とのこの関連性、あるいは現実が生じる出来事が如何に内面的な意味を担って経験されるのかに関する、心理学的な見解を以下に述べていきたいと思う。

3. 分析心理学の観点からみた外的現実と内的現実との関連

まずはじめに、分析心理学の観点から、篤義の体験を振り返ってみよう。篤義の心に浮かぶ様々な「絵」は、分析心理学の表現ではイメージに相当するように思われる。イメージとは様々な情動的ニュアンスが込められた表象であり、分析心理学では意識と無意識とを橋渡す媒体としてイメージを重視する。分析心理学におけるイメージは意識的に作り出されたものではなく、無意識から浮かび上がってくるようなものを指す。そこでイメージを通して人は自らの心の深層でうごめくものを捉えることもできると考える。篤義はいろんな「絵」を容易に思い浮かべることができたが、それは視覚的な記憶に留まるものではなく、その経験にまつわる感情や情緒を含みこんでもいた。それに「絵」は意識的なコントロールを越えて勝手に動き出すこともある。「絵」は篤義の意識を越えた心の自律的なそして無意識の営みの反映でもある。だからこうした「絵」と交わる時間を多く持っていた篤義の意識は、かなり無意識に開かれたものであったと考えられる。彼が現実の対人関係に適応するのが困難なのもうなづける。なぜなら、彼の自我は外的現実と比べ相当に内的現実と目を向けていると考えられるからだ。

多くの「絵」の中でも篤義を捕らえて離さなかったのが大蛇の絵である。彼を「弱虫」にしていると篤義自身も考えていた心の中の難敵である。この大蛇と如何に立ち向かうかが、小説を通じての篤義の内的テーマと言えるだろう。ところで分析心理学なら、この大蛇はグレートマザー元型の象徴と表現されると思われる。元型とはユングの想定した普遍的無意識の構成要素であり、我々の心に様々なイメージを送り出してくるその根源のようなものである。なかでもグレートマザー元型は、世界中の文明において母なる神として表現され畏怖されてきたように、あらゆる物を生み出し養い育てる肯定的側面と、一切を呑み干し命を奪い無に帰してしまう否定的側面を併せ持つ。人の成長発達の過程をいくつかの元型の継時的活性化として概観するノイマン Neuman, E. は、グレートマザー元型を、幼少期の意識発達において最も重要な役割を果たすが、思春期青年期の意識の成長のためには意識がそれから一定の距離をとってその影響力を削ぐことが必要であるとして、これを「母殺し」あるいは「竜退治」として重視している。そこで分析心理学の観点なら、グレートマザー元型が篤義の心の中に強く付置されていると理解するだろう。それに比して脆弱な自我意識が彼を「弱虫」にし、人前でのおどおどし

た他者追従的な態度をもたらしていると考えられる。しかし篤義の心の中に新たな動きが生じてくる。グレートマザーに立ち向かう動きである。彼の心の中にグレートマザーからの独立を勝ち取ろうとする英雄元型が動き始める。大蛇を克服するという小説のテーマは、まさにノイマンの言うところの、英雄による竜退治にはかならない。これによって篤義は子供から少年へとイニシエートされていくと考えられる。したがってこの小説は篤義のイニシエーションの過程と見なされるであろう。分析心理学の知見を援用すれば、小説で描かれている事柄は、上述したように、主人公篤義の自我意識の確立をめぐる格闘と解釈できるであろう。

ところで分析心理学では、こうした内的な課題への取り組みに際して、それと呼応するような外的な出来事がしばしば生じてきて、外的な課題に必死になって取り組むことが、同時に内的な課題への取り組みにもなっているというという現象がしばしば観察される、としている。分析心理学において人生の究極の目的とされる個性化過程とは、むしろ内的現実と外的現実とのこうした不思議な一致を通して進展するものとも言える。篤義の場合、グレートマザーとの対決は、外的現実としては、第一に子猫を間引く母親との対決という形で取り組まれている。母親に対してこれまで見せたこともない強い反抗と自己主張を見せ、グレートマザーを投影した母親に立ち向かう。そしてさらに、大蛇と同一視されたクラスメートの集団に対して、篤義は第二の戦いを挑むことになる。篤義はこうした外的・対人関係的な出来事を通して、これらの問題と外的に必死に取り組むことを通して、心の深層で力を持つグレートマザーとの対決を内的にも進めていくのである。このように人が内面的に意味ある変化を遂げていくときには、外的現象がちょうどうまくコーディネートされたかのように生じてくることが間々あるものと分析心理学では見なしている。そこでこのような内面と外的事象との意味ある一致を、内界と外界とに共通した意味ある事象が配置されていると見なして、コンステレーション（布置）とも呼ぶ。篤義にとっては子猫の一件も、千代子をめぐっての級友との一件もうまくコンステレートされているとしか言いようのないものである。これまで述べてきたように、分析心理学において、外的現実と内的現実との望ましい関連性とは、外界と内界との意味ある一致であり、個性化過程における主題に内的にも外的にも取り組む際に見出されるようなあり方なのである。

4. クライン派精神分析学の観点から見た幻想とその象徴化としての外的現実

次に深層心理学のもうひとつの系譜である精神分析学の観点から、外的現実を心の内面とつながりあうものとして体験することについて考察してみよう。精神分析においては、先述したように二つの現実を想定している。外的現実と心的あるいは内的現実とである。そして内的世界の探求を徹底して進めたのが、精神分析学の数ある学派の中でもクライン Klein, M. に始まるクライン派である。この学派の観点を援用して、小説に描かれた篤義の体験をどのように理解できるか試してみよう。キーワードは幻想、象徴化、そして抑うつ態勢である。クライン派の考えによれば、心的あるいは内的現実の実体とは、当人にもほとんど意識されていない無意識的な幻想である。我々は誕生以来絶えず幻想を生み出し続けて生きている。幻想は本能の精

神的表象である。つまり身体生理的体験が心理的な体験として経験されるのは幻想を通してなのである。幻想はこのように心と体とをつなぐものなのである。幻想は原初的には本能と衝動の直接的な表現であるが、それは瞬く間に複雑化する。なぜなら衝動に対しての防衛もまた幻想に組み込まれるからである。このように幻想は心の世界に充満するので、外的体験というのが成立するのは幻想を介してとなる。我々が外的出来事を経験するとは、幻想という媒介を通して出来事を経験しているのに他ならない。でなければ、出来事に意味は感じられない。しかしまた幻想と外的現実との間には矛盾が生じ葛藤が起こる。それをどのように解決するかが幻想の発達と関連する。幻想が外的現実を無視してその正統性を主張するなら、外的現実は無視されたり歪んで認識されるか、あるいは幻想のとおりにより外的現実が動くように圧力が加えられることになる。これが顕著に見られるのが妄想・分裂態勢とクラインが名づけた精神病的水準で機能する心のあり方である。反対に外的現実が吟味され、それに即するように幻想が修正されるならば、つまり主観的な全能感に満ちたものからより現実的なものに幻想が修正されることで外的現実が受容されるならば、幻想は抑うつ態勢で機能する心のあり方に相応しいものとなる。こうして生じる幻想と外的現実との相互作用が思考である。「われわれは現実には、幻想に基づいた予見をもって接近し、現実の中に絶えず幻想を植え込み、自分の幻想を吟味してゆくこととして現実というものを体験するのである」(シーガル Segal, H.)。

さて次にもう一つのキーワードである象徴化について述べよう。この概念は何も精神分析学においてのみ用いられているわけではない。広く心理学において、他の何事かを表象する現象を指す言葉である。しかし精神分析においては象徴化あるいは象徴作用は極めて本質的な事象である。フロイトはヒステリー患者の分析においてその症状を患者の無意識的幻想の象徴的表現として解釈しようと努力したのである。幻想が理解されるのは象徴作用を通じてなのである。クラインは子どもの分析治療において子どもの遊びが幻想の象徴的表現であること、それゆえ大人の患者の夢や自由連想と同様に分析されうるものであることを強調した。また象徴は幻想を他者に伝える伝達機能を持っているばかりでなく、内的な伝達、すなわち自らの無意識と通じ合うためにも欠かせないものである。象徴を介してのみ我々は自らの内的現実とふれあい意義深く生きることが可能となるのである。ところで象徴化が可能となるためには条件がある。象徴と象徴されるものとの間を十分に区別する主体が存在することである。精神病的水準ではしばしばこの区別が崩壊する。象徴がもつそれ自体の特性が見失われ、象徴されるものと混同される。シーガルが象徴的等価 symbolic equation とよんだ事象である。このときには言葉もまた象徴としての役割を喪失し物自体となってしまうので、精神分析にとって本質的な解釈という作業が意味を成さなくなってしまう恐れがある。言い換えれば、象徴作用が滞りなく機能するためには、心が抑うつ態勢で機能していることが必要なのである。言葉によって内的世界を表現すること、すなわち言語化は象徴作用の高度に発達した形である。

幻想とともに象徴作用も心がどの水準で機能しているかによってその性質を大きく変えることになる。抑うつ態勢と呼ばれる心の機能水準は、心の中に我々が持つと考える自己と対象、そしてその関係とが、不安や罪悪感によって現実感覚を大きく損なわれることなく、おおよそ

現実的な性格が維持されている状態である。全能的に理想化されることは放棄され、善悪相半ばする性格が維持される。またそれに伴うアンビバレンツが持ちこたえられる。幻想においては迫害的な不安に支配されることはなく、むしろ対象の喪失や傷つきが懸念され、損なわれた対象を償い修復し再生して回復させることが心の重要な営みとなる。その営みは創造的な想像となり、人生を豊かにするものである。そして象徴作用がこの営みの中核にある。

以上述べて来たクライン派の理解をもってするなら、小説の中の篤義の営みは以下のように解せられると思われる。まず、篤義が彼の心に傷ついた対象を抱えていることが見て取れる。それは直接的には間引かれる猫たちであり、病のために力仕事のできない父親であり、貧しさのためにかつては近所に物乞いをせねばならなかった母親の記憶であり、やはり貧しさのためによくいじめられた姉の思い出である。あるいは引き剥がされて火にくべられる彼の家屋の壁板である。彼自身貧しさに大いに傷ついている。そして級友に知られあざけられる事を恐れている。篤義はこうした傷つきゆえに、抑うつ的な気分には落ち込んでいる。しかし一方で、こうした傷つきは彼自身が為したものである。子猫の間引きについて、彼は責任の一端を感じている。便所の壁板が剥がされる時も、彼はその一部始終を傍観していたのだ。そこで篤義の心の中に償いと修復への動きが強く布置されてくる。彼が頑として守ろうとした黒い子猫は、償われることを待っている彼の内的対象の象徴的表現でもある。子猫を救うことで、彼は自らの傷ついた対象を回復し再生しようと望んだと思われる。千代子への同一視も同様の機制がうかがえる。篤義にとって千代子は貧しさゆえに傷ついた自分自身を投影したものであり、自分自身の象徴でもあった。なんとか千代子を助けねばならないとの心の動きは、傷ついた自分自身を救うことに重なる。修復と償いへの衝動が彼を思っても見なかった行動へと駆り立てたのではなかろうか。こうして外的出来事が篤義の内的必要性から創造的に生み出されたのだ。だからこうした偉業を成し遂げることで彼の内面は変わる。傷つき病んだ対象を再生できた篤義はもはや抑うつ気分が苦しめられることはない。彼は回復し再生した対象をもち、そうした対象に支えられた幻想を生きているからだ。このようにクライン派の観点からすると、篤義の行動は傷ついた内的対象を修復しようとする幻想に動機づけられた営みであり、幻想の象徴的表現として理解されうると思われる。したがって外的現実と内的現実との望ましい関連のあり方とは、クライン派の観点では、抑うつ態勢において対象の修復や償いの幻想に動機づけられた創造的な行動が外的現実において生じてくると見なされるだろう。

5. 独立学派に見る想像的体験

さて次に、心的あるいは内的現実と外的現実との関係について、クライン派とはやや異なる観点を提出している精神分析学の見解を取り上げてみよう。ライクロフト Rycloft, C.、ミルナー Milner, M.、ウィニコット Winnicott, D. らいわゆる独立学派と呼ばれる研究者たちの見解である。彼らの特徴は、外的現実の役割をクライン派以上に拡張しているところにあると考えられる。外的現実とは幻想を限界づけ修正するためだけのものではない。発達的に見るなら、外的現実とは内的現実と対立葛藤する以前に、一致し同調する段階が見られるし、人生の始まりが

この両者の一致にあることがその後の精神的健康にとって必要なことでもある、というのが彼らの主張である。我々は乳児期に、自らの身体生理的欲求に見合った環境からの対応を得ることで、言い換えれば環境が主体の欲求に順応することで、内的現実と外的現実との間にしばしの一致、あるいは融合の体験を得る。それに伴って、「現実についての一種の想像上の感じ」(ライクロフト)や外的世界との「創造的な関係」(ミルナー)が育ってくる。つまり幻想は外的現実からかけ離れることなく、現実としっかり結びついて発展していくことができるのである。このとき、フロイトが挙げた二種の思考形式、一次過程と二次過程とは乖離せず、外界現実を、その実際の特徴を損ねることなく、しかも情緒的に想像的に理解し味わうことが可能となる。反対に、人生の早期に主体の欲求が折りよく満たされることができない経験を繰り返すなら、幻想は外的現実から離れ、外的現実に代わって欲求を満たすもの、あるいは欲求不満を防衛するものとして理想化され、外的現実と乖離して発展することになる。幻想は外的現実と接点を持たないために一次過程の思考のみが働き、神経症の症状に表れるような象徴形成を生み出すものとなる。その一方で外界現実には情緒的な意味合いを失い、単に知的に対処される現実になってしまう。ライクロフトもウィニコットも、幻想が外的現実との接触を失い外的現実から乖離した空想となる場合と、外的現実との接触を保った想像となる場合との差異を強調している。

ウィニコットは上記の思索をさらに発展させて、内的現実と外的現実との間にもう一つの体験の領域、錯覚の中間領域を提唱するようになった。これは幻想うずまく内的現実でもなければ、客観的事実である外的現実とも異なる領域である。ウィニコットはこれを可能性空間、あるいは潜在空間と名づけた。これは赤ん坊と母親との関係の中で育まれるとして、ウィニコットはその発達の起源に言及している。彼によれば、母親がほぼよい育児を行っているなら、赤ん坊の外的事象は赤ん坊が作り出した幻想と合致し、両者の区別は意識されない融合状態が人生の初めにある。ここでの赤ん坊の体験は全能感である。母親の程よい世話によって赤ん坊は自分の周りに生じたことをあたかも自分が作り出したかのように体験できるからだ。この全能感をもとに、赤ん坊は外界現実の対象と関わり始めるが、赤ん坊にとってその対象ははじめから外界の物と認識されているわけではない。第三者から見れば赤ん坊に与えられた対象かもしれないが、赤ん坊にとって見れば自分で作り出したかのようにも体験される。これが移行対象であるが、こうして移行対象とのかかわりが生じてくるような領域が可能性空間なのである。やがて可能性空間では遊びが生じてくる。遊ぶことは内的現実ではない。なぜなら、遊びにはおもちゃが必要であり、おもちゃは実在する対象であるからだ。かといって遊ぶことは外的現実でもない。おもちゃにいろんなイメージを託して遊ぶことは、客観的事実的現実とも異なる事象である。おもちゃとは移行対象であり、遊びの生じるのは内的現実と外的現実との中間領域においてなのである。言い換えれば、遊びは、母親の育児への赤ん坊の確信とそれに基づいて生じた赤ん坊の全能感とによって生じてくるものなのである。この内的現実と外的現実との中間領域は、当初は母親の程よい育児によって母親にいたるところで体験されるが、やがては幼児の個人的な心に包み込まれる。そうすることで幼児は一人であることが可能となるのであ

り、遊びから派生するあらゆる文化的な体験が可能となるのである。

この可能性空間では、内的現実によって由来する幻想と外的現実とが混ざり合い、あたかも～であるかのようなという想像が享受されることとなる。外的現実が遊戯的に如何様にも体験されながら、なおかつ外的現実の特徴が無視されてしまうこともない。そこには人の心を豊かにするような象徴的実現がここかしこにある。したがって可能性空間を豊かに持つ人は現実を想像的に意義深く味わい体験することができる。そこには創造的に生きること、充溢した生きる意味の感受がある。しかし他方、可能性空間を十分にもち得ない人もいる。ウィニコットの理論を捉え直しているオグデン Ogden, T. の表現に従えば、彼らは一方では、幻想が優勢になって外的現実を呑み込んでしまい、主観に左右されて外的な現実を体験できなくなってしまうっており、もう一方では、外的現実が優勢となって、主観的な体験ができなくなっている。オグデンによれば、可能性空間での体験は幻想と現実との弁証法的対話であり、上記のような可能性空間の崩壊は幻想と現実との想像的響き合いが損なわれた姿なのである。

小説に戻るなら、篤義の引き起こした二つの行為、子猫を守る母親への反抗と、千代子を守ろうとして級友と対峙したことは、ウィニコットの言葉を借りるならば、想像的な遊びであったと言えるだろう。子猫や千代子は実在する対象であるが同時に、篤義の内的な思いが凝縮されている存在でもある。そのような対象は篤義にとってのいわば移行対象であり、彼らとの関わりはウィニコットのいう意味での遊びに相当すると考えられる。遊びゆえに、篤義の心をこのようにも変容させ、治療させることが可能であったのだと思う。治療場面で遊ぶことが治療につながると考えるウィニコットは、治療場面で患者の幻想が具体的な姿をとって演じ出されることを劇化と呼んで重視した。篤義のこれらの行為は、この劇化として理解するのが相応しいと考える。

ところでこうした自己治療的な行動が生じ、しかもそれが有意義に心の変容に結びついていくためには、その場面を管理する存在が重要であるとウィニコットは述べている。遊びが十分に経験されるには遊びを見守る存在が必要なのである。それは可能性空間が母親への確信とも言える信頼に基づいて形成されると上で述べたことと同義である。小説では、篤義の両親や担任が日頃から彼のありように注意を払い、彼の行為の意味を深く受け止めようとするところに、篤義がいかに厚い対人関係の絆に支えられているかを見て取ることができる。しかも篤義の行為は両親によって、また担任教師によってその意味が思案され、しかも是認されている。このような篤義を包み込む他者の理解があってこそ、彼の行為は完結するといえる。したがって篤義の行いは、彼の外界への信頼に基づく自己治療の試みであり、新たな自己の誕生を外界との間で相互に認め合う行為であったと考えられる。この観点からすれば、外的現実と内的現実との望ましい関係とは、内的現実が遊びとして演出される場を外的現実が保障し、外的現実と内的現実との間に創造的な体験ができる間隙が想定され、外的現実と内的現実とが想像的に橋渡しされているようなあり方と見なされよう。

最後に、この小説を彩る自然とのかかわりについて言及しておこう。この小説を魅力あるものとしている重要な要素は、自然と人とのかかわりであろう。篤義もまたいくつかの川漁に従

事する様が描かれている。ミミズをえさに竹筒を細工した漁具でうなぎを捕らえるゴンブリや昆虫の幼虫をえさにタコ糸に錘の石を結んだ簡単な仕掛けで川魚を狙うもの、それに川の淵に潜ってもりで鮎を捕らえる素もぐり漁などである。これらは遊びであると同時に家族の食卓にのぼる漁であり、父親の商いの素材ともなる。それゆえ日常生活から遊離したただの遊びではない。かといって義務や強制された行いのような退屈や無気力さは微塵もない。反対にこれは真剣だが生き生きとした想像的な遊びである。篤義はこうした漁に従事する際に、大漁の妄想を膨らます。しかし彼は実際に漁具を操り、現実には魚が捕れるのである。ここにも内的現実と外的現実とが交錯する様を見て取れる。こうした漁自体が可能性空間での遊びに他ならない。四万十川の自然が篤義たちにこうした空間を提供しているのである。文字通り母なる川である。そこで彼らはふんだんに中間領域での体験ができるのである。このような体験の豊穡が彼らの暮らしを貧しいながらも豊かなものにしている。篤義はじめ家族はこうした川の自然を相手にした暮らしで精神的にどんなに癒されているかわからない。これまで精神分析学において外的現実と呼ばれるものは、現実の他者との対人関係であることが多い。そして外的現実と内的現実との関連とは、具体的には、たいてい、母親や治療者といったその人にとって重要な他者との実際の関係と、その人の幻想における内的対象関係との関連のことである。しかしながら小説の登場人物のような自然と豊かなかかわりを生きている人にとって、自然対象との外的あるいは内的かわりを云々することが十分に意味あることのように思われる。可能性空間としての自然環境の意義については今後の検討課題としたい。

6. 結論

小説の主人公篤義の行動を、内的現実と外的現実との関連として捉えたとき、どのように理解されるかを、分析心理学と精神分析学の知見を援用して検討してきた。学派によって内的現実やその外的現実との関連を説明する概念が異なるので、それらを総合的に議論するのは容易な事ではないが、本稿の目的とした、健康で望ましい現実感覚のありようについては、幾つかの示唆が得られたと思う。分析心理学の観点からは、個性化過程の一端として生じてくる外的現実と内的現実との意味ある一致という現象が挙げられる。ここではその人にとって主題となっている課題が内的にも外的にも生じてくる。このようなことが本人にも自覚されうるなら、外的な出来事は偶然に生じたことではなく、意味深いめぐり合わせで生じたと感じられ、そういうものとして真摯に取り組まれることにもなろう。このような時我々は意味の充溢した現実を経験することであろう。クライン派精神分析学の観点からは、我々の行為が如何に幻想に強く動機づけられているかを教えられる。幻想において取り組まれる事象は外的現実には象徴的な表現を見る。したがって豊かな象徴的な意味を担った行為は我々に強い現実感覚を引き起こすであろう。健康で現実的な精神的機能水準では、償いや修復への衝動が創造性を生み出し、我々に絶えることのない心の仕事をもたらし、外的現実での生産的な行動へと我々を促す。独立学派の精神分析学の見解は、発達早期に外的現実の内的現実への順応が両者の調和した経験の場を作り出し、それは成長しても想像的な経験の領域として心に内在化されると考える。こ

うした経験の場を豊かに持ち合わせている人は、遊びがそうである様に外的現実の体験にいろんな想像的意味合いを含みこませることができる。そうしてこそ我々は現実を空虚で無味乾燥としたものではなく、生き生きとした現実感覚でもって経験できるのである。

臨床心理学においては、内的現実が深く探求されるにともない、改めて外的現実の意義が再評価され、上述したような内的現実と外的現実との相互的な関係が認識されるようになったとも言えるであろう。健康で望ましい現実感覚とは、決して機械のように感情や情緒を交えず客観的に事実を観察するあり方にあるのではない。感情や情緒と結びついた内的現実が外的現実によく呼応してこそ、あるいは外的現実が内的現実によく裏打ちされていてこそ、我々は健康な現実感覚を生きることが可能であると考えられる。内的現実の側から言えば、外的行為は内的現実の象徴的表現でもあるが、こうして表現できてこそ、内的現実は心理的に取り組まれ修正や変容も生じてくる。つまり内的現実にとっても外的現実是不可欠なものなのであろう。反対に現実感覚の健康さが損なわれている人は、外的現実と内的現実との上記のような対応性が断たれてしまい、外的現実は無味乾燥した感動のない事実の連続に過ぎなくなり、内的現実には如何なる影響を与えることもなくなってしまうので、常に空虚感やむなしさが付きまとう。一方、内的現実が外的現実での表現手段を見出しえず、それゆえ外的現実に触れることで生じるはずの修正や変化は起こらず心のうちに留まり続けることになろう。ライクロフトはこうした状態こそ精神的な病理の状態であり、心理治療の目指すところは「乖離してしまっている数々の精神機能を互いに結び合わせることだ」と述べている。臨床心理学においては、生き生きとして想像的な現実感覚こそ健康で望ましいものと考ええる点ではほぼ一致を見ていると考えられるが、そのためには上述した外的現実と内的現実との相互に不可欠で依存しあう関係が前提とされることが考えられるのである。

文献

- Hinshelwood, R. D. (1994) *Clinical Klein* Free association Books, London. (福本修・木部則雄・平井正三訳「クリニカル・クライン」誠信書房)
- Isaacs, S. (1948) The Nature and Function of Phantasy *International Journal of Psycho-Analysis*, 29, 73-97.
(空想の性質と機能 松木邦裕編・監訳「対象関係論の基礎」新曜社 収録)
- 河合隼雄 (1967) ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 (1991) イメージの心理学 青土社
- 松木邦裕 (1996) 対象関係論を学ぶ〜クライン派精神分析入門 岩崎学術出版社
- Milner, M. (1952) The role of illusion in symbol formation. *The Suppressed Madness of Sane Men* Tavistock Publications Ltd., London 収録
- Neumann, E. (1971) *URSPRUNGSGESCHICHTE DES BEWUSSTSEINS* Walter-Verlag AG Olten (林道義訳「意識の起源史」紀伊国屋書店)
- Ogden, T. (1986) *The Matrix of the Mind* (狩野力八郎監訳藤山直樹訳「心のマトリックス」岩崎学術出版社)
- Rycloft, C. (1968) *Imagination and Reality* The Hogarth Press Ltd., London (神田橋・石川訳「想像と現実」岩崎学術出版社)
- 笹山久三 (1988) 四万十川 第一部 あつよしの夏 河出書房新社

- Segal, H. (1991) *Dream, phantasy and art* Routledge, London (新宮一成他訳「夢・幻想・芸術」金剛出版)
- Storr, A. (1983) *Essential Jung* Princeton University Press (山中康裕監修「エセンシャル・ユング」創元社)
- Winnicott, D. W. (1971) *Playing and Reality* Tavistock Publications Ltd., London. (橋本雅雄訳「遊ぶことと現実」岩崎学術出版社)

(原稿受理 2004年9月24日)